


 安方忠義傳
 前編四冊
 卷之三

13
 1305
 3



1305
3

善知安方忠義傳前編卷之三上冊

江戸 山東京傳著



名取川 第八條

去る天慶小東國の猛將將門亡び西海の賊首純友打とくうり以來
 世の中無爲に屬し万民を安堵の思ひなりけり頃日又東西の
 國々より飛脚到來して去る頃より群盜蜂起し官物私財の差別
 なく奪取を妨るるまこといへども國司の制及りども中へ御勢下され
 ば誅戮いひのち人民の煩をこれよこさうらぬと日くみ註進ひまわりの
 けり諸卿貪義ありて在京の武士も命を征討あてりて即將帥の
 度量を撰てされ其人くみ左衛門佐兼武藏守源滿政左衛門
 尉平惟時周防前司源頼親冷泉院判官代源頼信をぞえりしと
 是

善知安方忠義傳前編卷之三上冊

けられぬ光朝臣とてさたならん。肥前の大守小補せられ九洲小下りおぼし
むらに。此人ののぞき宜旨をかうられければ其うちも頼信の関東小
下りて衆賊をまづむべきは命せられきり。柳頼信の多田の満仲の二
男ふく。則頼光の舎弟なり。武勇文才父兄ふおとさるる大將もく。
いさゝも軍勢ふ怠りしういられぬ少や。近曾俄ふ心かり。娼酒も
耽り驕奢ふ長。侍遊宴樂ふのこあじつしけさ。錦襖額額
かごり翠黛紅粉化粧ひたる養女床を争ひ。昔酒珍膳座中ふ
みち綾羅の袖ひひるが。頻鳥の音和げ野曲謳歌日夜
たぐどいれが鳥小春の日も長とをむくど。秋の夜も短とをこら
けり。さうれゆえに。此度おとす宜旨をうりうりみくら。都々離て遠と
東下りて愁ひ。重病と披露して西山の下館小引籠。朝廷に

まことをも憚らむ。親兄のおもひんぞれ所をも顧みず。家臣の諫をも用ひ
一向娼酒及びさかりけり。此時も弥生の半あり。下館の搦今盛
咲乱。海をあざむく風情ひりければ。頼信さるるの遊を仕尽し。
今日も兼く飼おたう。雞ども合せつるぐとて。庭上の花の下
小緋緞子の幔幕をひきめられ。片くと其風小散満く炎
を揚る小異あふと。幕の裏小床をまうけく。紅緑の氈展布豹
虎の皮をかひなれば。さう小眼みたりし心も空よりぬ。頼信の正面ふ
ほうけたた。錦襖の袖の上みあぐ居る。螺鈿の服息ふ。又小
羅の傘蓋なごかけさせ。左右の花中。小粧ひられ美女あふさ
あめて。かろく小酌をさしせ。大盃を傾く花を賞つ。闘雞の支度
さうのさけ待ぬ。臺盤所より持運。種々の献盃様々の美物。かぞへ

事七卷之三十一



尺、まへうもあふぞ。程あく支度とのひと披露し、句薫蘭を凝し。
粧紅粉、瓜尽し、美、美女二十人。色々の花鳥を織尺し。深狂し、
袿衣を、一様みそごり。箇、雞を抱し、られあかの中軍をふみひら
つ。ま、めさつりて練出。爛熳し、櫻のり、に立ち、び、姿、い、つ、れ、を
花と辨ど、ぐ。實是蜀山阿房の六宮、ふ、二年人の嬋娟、瓜あ、ま、ひ、
邯鄲旅亭の、一、炊、小、五、十年の歡樂を、ま、め、も、か、や、と、ご、り、
なり。扱、十、番、と、ま、め、て、決、算、は、雞、瓜、合、也。其、ま、ぬ、い、ま、れ、
逆、も、瓜、ゆ、り、風、ふ、り、尾、波、を、た、て、沙、を、ち、り、し、
た、れ、怒、勢、あ、れ、バ、猛、志、あ、り。翅、小、と、め、れ、薫、物、護、都、
あ、り、ふ、か、り、。距、ふ、か、り、た、れ、黄、金、曜、と、り、日、小、映、と、或、
或、ハ、躑、地、を、肥、く、俯、伏、。瓜、榨、く、飛、舉、。威、風、益、猛、氣、勢、轉、盛、

なり。冠、瓜、た、れ、曹、し。翅、か、ま、り、甲、し。紫、を、以、く、劍、と、し、
距、と、以、く、戦、し、天、の、時、と、得、く、進、む、あ、れ、バ、地、の、利、と、失、ひ、く、退、く、
あり。漢、將、雄、威、の、盛、る、れ、不、異、あ、り。齊、兵、戰、膽、の、寒、く、似、り、漸、
小、雌、雄、を、決、し、勝、劣、瓜、こ、ら、け、る、あ、ぞ。毛、ハ、飛、く、春、風、ハ、花、を、散、と、
と、疑、ひ、血、ハ、流、と、秋、水、ハ、紅、葉、を、浮、め、た、と、あ、や、し、ら、ぬ。
頼、信、ハ、これ、瓜、と、大、喜、び。数、盃、を、傾、く、深、く、爛、醉、し、あ、り、く、身、を、
催、し、ける、あ、ふ、又、頼、信、の、家、臣、ハ、藤、六、左、近、輔、相、と、り、者、あ、り、。一、あ、れ、者、
あり、ける、あ、ふ、あ、り、て、零、落、し、權、民、間、小、居、く、れ、瓜、。多、田、の、滿、仲、公、彼、
畧、量、を、ま、り、み、招、と、む、く、禄、を、ふ、け、れ、あ、ぞ。藤、六、其、情、瓜、感、し、ひ、
小、家、臣、の、列、ま、あ、り、び、ぬ。其、後、滿、仲、公、の、と、う、く、ひと、し、て、頼、信、の、家、臣、あ、ぞ、
せ、れ、け、れ、。此、人、曾、く、文、武、の、道、ハ、通、ぜ、る、の、こ、な、く、。和、歌、の、達、者、あ、り、

前年將門の首を搦られし。眼をかくられし。割がの首よましく笑ひて。軀のふ今一度合戦とて。そのをこよむ。時小藤六がこる。

將門の米噓よりぞまされけられ。俵藤太が謀あり。

と口ごころみけし。忽眼をかくられし。云々。此藤六。頃日主君

頼信の牙持あり。こみ嘆く。あぐ。諫う。い。も。り。ひ。さ。れ。ば。あ。は。つ。く

諫を。一。折を。う。か。ひ。居。る。ふ。此日雞合の催あり。と。せ。よ。折と。あ。ひ

急。下。館。小。立。と。え。侍。女。等。小。案。内。を。せ。興。庭。小。到。了。頼。信。の。面。前

小。出。の。り。み。見。ま。へ。し。つ。し。ら。る。こ。の。け。か。ら。ば。れ。法。催。哉。是。ま。ぐ

度。く。の。諫。を。ほ。り。ら。ひ。ま。と。し。も。今。日。は。よ。く。法。少。さ。み。は。り。れ。う。

君。い。ま。と。法。若。年。あ。く。此。度。群。賊。追。討。の。お。り。た。宣。旨。が。か。り。り。あ。の

ゆ。法。武。勇。の。秀。も。ふ。の。え。と。ひ。ひ。ま。ぐ。畢。竟。法。父。君。伯。父。の。殿。法。兄

君の。法武徳の。い。み。た。た。御。餘。光。なり。然。る。ま。か。く。虚。病。が。か。へ。く。東。國。の

法。下。て。法。違。く。ま。あ。の。み。ま。ぐ。女。原。を。集。く。放。佚。無。慙。の。法。行。跡。

朝廷。が。か。る。い。め。あ。の。罪。は。是。より。大。あ。れ。は。ま。い。若。此。事。上。り。れ。と。こ。え

あ。ば。其。罪。法。身。の。み。御。一。族。の。法。う。あ。も。か。れ。ば。ぐ。殊。更。東。國。を

朝。敵。將。門。の。餘。類。か。ら。と。住。よ。先。達。を。所。と。高。札。立。賞。銀。が

出。し。探。索。あ。か。し。も。と。か。く。其。在。所。を。れ。ご。ら。け。た。ぬ。め。れ。の。あ

度。の。群。賊。も。心。定。其。族。あ。る。し。それ。が。か。く。安。間。と。暮。し。な。す。ふ

時。節。あ。あ。ん。一。刻。も。と。や。法。出。陳。兵。促。し。あ。ぐ。法。若。年。と。は

中。し。た。の。ら。法。辨。な。た。法。心。う。ま。と。何。の。憚。れ。所。も。あ。異。見。残。を

中。し。け。し。頼。信。大。み。氣。色。法。損。服。息。を。押。の。け。く。進。こ。出。や。を。と

藤。六。よ。法。これ。す。い。諫。を。度。く。と。か。く。我。父。兄。の。光。り。が。か。り。て。肉。を。と。る

よ〜専ふいひ〜。嘲〜辱れ糸。若年と侮くのみある。譜代古
老の者さ〜口瓜さ〜いもけらふ。汝一人ぬらん出く人もあげなるし糸
奇怪ありありあり。汝一旦民間小下り餓死んとせしを。我父の情よりて
再武士ふどりあげれしを。そや忘れし人か固く過言いふ。今一言ふ
あよぐ方ふ其座いたせと。声あや〜いひつ〜臂をさり。居たたく
あり。そ〜とみ〜みけと。左右ふみ居る美女等。手ふ汗か握つ
一言をいふりのあり。座中ひそ〜あぶりけし。藤六をおさ〜け〜たも
あく。なほ小膝か〜め。臂をお〜さ〜い〜。はても情なれは心
底うみ。是等のい〜た理を。御辨か〜君ふ〜あり〜。かあ〜と
天魔のい〜入〜た〜人。今のはひ〜あ〜。某薄命あ〜〜世〜零
落〜た〜。父君の法情ふ〜。再人か〜た交〜を〜と本。

いつの世あ〜い〜と〜。其洪恩をお〜む〜と。かく人ふぬ〜ん出〜
御諫も〜とあれ。柳闘雞と。大内の御遊〜。武家〜た〜と
あ〜ぶ〜た〜又〜。傳聞唐の玄宗皇帝。楊貴妃を愛〜。驪
山の花清宮あり〜。嬉酒ふ耽〜。自然仁政撫育の行跡乱れ〜
が。揚國忠雞を献〜。一向闘雞瓜好〜。小兒五百人〜撰〜。
治雞坊〜い〜所を建〜雞瓜養〜。時の人れ語ふ。児を生ハ
文字〜識〜を〜ら〜ひ〜。闘雞走馬。讀書ふ勝〜り〜。上〜
嘲〜。果〜。安禄山が爲小世瓜乱〜。或〜魚目昭公の時。
季平子。郗昭伯〜。雞を合〜。季氏ハ雞の群小芥子を播〜。郗氏の
雞の目ふかけ〜せ〜。郗氏ハ距を金〜。銘〜。これ〜互〜怒をひ〜
〜。大〜遺恨とありし。春秋小明あり。或ハ淮南子。禍の從

くまある所、雞の足ふ始る。其大を我におよびて。社稷を亡とせしむる
と云ふ事あり。近く我朝の例をひけが。去れ兼平執事。禁裏より
十番の鬪雞ありしを。童どもが見学す。時へは足が合せり。次
第、小豆あびたじくあり。家くみ五十羽、三十羽、飼立く。四本柱
を立土俵をあらへ。相撲場のごとく、小補理く。日くふとれ、我結構こ。
こみ此夏朝廷小達し。堅くその真行を止らね。雞を尽く山く
放したる。果しく、将門純友の一乱起り。ほぐく世を乱さんじり。
たむしづくみ十餘年前の夏みく。君もよくまろしめと所みあふじや。
はれを足を弄く。不祥を招く一端ありて。鬪諍をむく、我の前兆あり。
かくいさかしたむ、小日、我費くみある。くもくもく、かむね。とくく
止られく。東國流下りの、伊用意こそあふよ。ほくま。これ伊覧せよ。

如此將門の残黨、我かめとり。いらく首をとり、といひあがり。かき
の雞どもを捕へ。尽く首捻切く、捨りけ。頼信も、近曾
我、火性短氣ありたれ。此時、大に燦酔したる。忽怒、心頭
お起し。汝、我秘藏の雞を殺と条。我、敵對も、自然あり。りや
おれ、がごとし。せきおせ、たぐ。手むや、白鞘巻をとり。杯盤を踏
越く。床の下、お花く。けし。ば。あこ居。く、美々等、大に驚こ。こ
伊短慮と。さむれ袖、あり。こりて。柄、手、次、かくれ。とて。へ。ら。忽
血け、つり。を。つと立の。藤六、居。ど。み。お。さ。み。あ。が。ら。さ。く。も。御
は、入。る。た。う。へ。兼。く。の。受。悟。あり。といひ一言。此世の名、残、あ。く。衣、袈
袂、お、斬。さ。げ。られ。憐、む。く。五、十、余、歳、一、期、こ。く。眞、途、の、旅、よ。赴
こ。ぬ。衣、さ。う。さ。の、た。の、さ。て。かり。け。時、も、一、陣、の、狂、風、颯、と、吹、お。れ。

善書口巻



藤一左近
頼信を
いさめ
手打
のよ

善知卷之三

七

梢の花を散り。頼信の承うちふ冷氣志みとちねとおぼへざいづく
 よりう集りけん。黄なる蝶くあまの群花。えましく充満し或は塊り
 或は碎け。花のこ飛牙あり。四面八方に散乱し。そのさほたかひをさふ
 似たり。頼信の形勢をあまごえさ。あま怪とさな。去れ承平年間。
 常陸下野ふかくのごとた怪異あり。将門の一乱起りたる例あり。
 正是兵革の兆なり。東鑑 叔と藤六がいひつごごとく。将門の餘類東
 國にかられ住り。世に乱んと企ふ疑あり。恠むるごとくといひつ。
 血刀をさげさく。手刃さすぬと頭なたさく。摧惘然とこれ存あり。
 忽迷雲をれ胸月がた。本心再立ちく。夢の醒さすおぼとく。
 おぶへ。このれが手ふつきた。血と藤六が死骸がえく大に驚と。か
 らふ子細を尋ね。叔は我かれを手ふかけ。さるるもおぶへざりた。

不便の事をおまじたりと。一向後悔せし時。かの蝶をそとく空中に
 去さる。是より自己志がたなり。女原を去りぞけ。俄に病全快の
 よしを披き。東國出陣の支度をぞいそがどけるのら。此時に
 子細を尋ね。頼信俄に行跡が乱した。かの内芝仙の蝦蟇の妖
 術の所為あり。さばぐふ心を狂りせ。忠臣を殺さしめく下の恨が
 ひきいごさせ。つひに自滅させんとさる。藤六が忠義の魂魄蝶
 と化して。本心再立ちかつせけありとぞ。誠是なごひしれある忠臣也。
 叔は藤六が毒を綱手といひけ。夫主君の手打ありしと。さ
 大に悲し。頼信本心小立ちかへり。と露さる。諫言をもちひむりて
 夫が手討あり。さるる不道人あり。我輩をも捕り討り。さ
 りんハ必定あり。さるる誰ありて。夫の跡をさるるさる。さるる

今宵のうらみ出奔し。いづかみもかれず子ども等をおひ立。再家成
 おらとふ志つど心成はごめ。今年十六才ありければ娘唐衣が手といひこ
 いまご孩児ありければ男子成懐あり。家賊をよめてその夜のうらみいづく
 ともろく逃失けり。誠お衣のありさぬあり。頼信を藤六を手みかけこれ
 こと成益悔とせめて亡骸をわんごはふよりかきせん。妻子成召しよめ
 出奔し家小ありととささくければ。我怒をおそれてかまひりく
 逃かれられり。かきくも不便なりと。その跡をたぐはしめ。藤六
 が死骸成。あつく葬らしめ。おほく布施を出し。併事成。堂よりせ。
 己小飛足の支度と。のひまきと。吉田成。えびく東國みそ下り
 ちられ。

○案小将門の采譜よりぞとられけるの狂歌の藤六丸近はよとらみ

あるよし平治物語みつる

○宇治拾遺物語小 昔よりあみごの誓言とめゆりのとらとらふ

とどまるといふ狂歌もあま藤六あり

○拾遺集小藤原輔相とあはれ藤六あり。詠せれ歌三十六首載

たり。みる俳諧体の歌あり

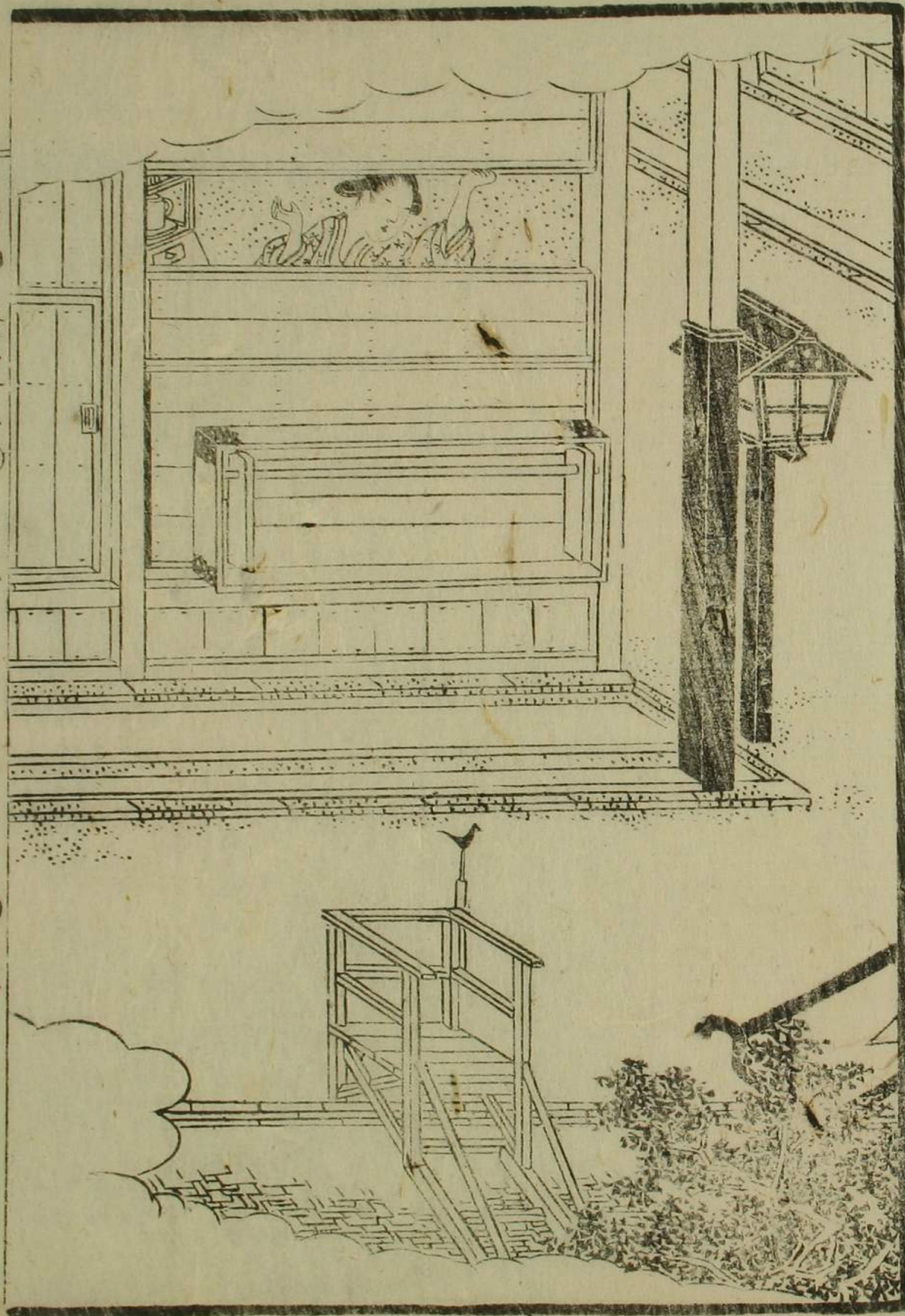
○尊卑分脈所記系圖を案小藤六を權中納言藤原長良郷の子

藏人正四位下越前權守弘經の三男あり。名の輔相。藤六と号と

無官あり 此草紙小頼信の臣ととら。狂言綺語あり

醍醐提山 第九條

さても藤六が妻綱手は住なれ家をもぐれ出。一条棧敷屋といふ所
 たのそし者のおれなより。その家小深くかれり。権月日とおらり



善和巻之三



京一条様敷屋
片輪車の鬼
藤六が妻は
歌を詠む

善和巻之三

けり。あつたふその頃浴中み妖怪住く。さぬくの寢異あり。老若をえ下
 のど男女をまゝつた。人おやくうまに中み。けけ小児のうごることおほく。
 此彼あうせう人の親族の嘆悲声まひくもなげうり。その妖怪を
 いうたれそのとえとあたる人あふげととも。折く泣夜大路小車のまゝに
 音ことゆれことなり。これかの寢化夜行の時ありとく。初夜より戸樞を
 かゝるおそれあひなり。頃しも秋のそらあつこ。猛雨車軸流し。烈風樹
 木をたかしくはまじら嵐の夜ありけれ藤六が妻細手。東西のみどり
 子にそく乳しと脚居しけふ。窓の戸を吹放ち。顔ふ雨を吹こみまれば
 これをふせんとも起上り。窓の下ふ立よりけ折しも車のさうる音大お
 むたれば。何の心もはうご。覗んてけふ。牛もまきむく人もある車。おのど
 とめぐりく追進来ぬこの怪しやとおりうち。車の下より猛火炎と燃

あがりく暗夜を照す。其光てふつた。らかて破損して片輪あつて車あり。
 折しも烈風どんとおろしそりの見の翠簾をあまらぐれつて見はし。
 金襴纈纈が小すし。紅の袴をまね。緑の黒髪をふり乱し。太眉お
 かねらるる上臈車のうちありけれ。藤六が妻をえけけ。色音はめ
 願ふそりたる顔をさし出。かたされ声し。妻をえんより汝が子成
 えよといふ。細手大お敬馬と。子の脚る所をえれば。びのの間み失うり。こ
 情ましとおもひつるもあ。大路の方小子のあく声とええられた。このこ
 おそりともうら忘とく。又覗るる。かの上臈さなはけし。汝が子へらあ
 あらどといひつ。小児をさしはふまけけはし。細手悲とせんうさ。あ
 歌へ鬼神の心をも和く。おほひのをまて
 罪科ハ我ふことあれ。小車のまゝかてけね子まかへし。

と打歎こしけし。上臈呵くと笑ひ。歌の意はこゝろえなれど。妾今宵と
いまだ食料をりとせ。いと餓されば。かくさしとて。小児を志めとらし。手足を
ほきく。折肉をひきり。くひひきり。耳のそへす。でせられた。口のちぶり
血も流り。おそろし。みどもおろり。綱手の此あり。さぬ成るより。一声呀と
さけむ。つものけ。不倒と。絶入り。さて物音。お驚く。家内眠を醒し。あそ
ぬ。ちた湯薬を。あそく。介抱。さる。ふより。絶。よ。蕪生。とい。とも。夫非命。お
死。ふれ。人。ふ。子。を。さ。れ。く。か。さ。あ。る。歎。お。心。乱。狂。氣。し。く。七。日。あ。り。昼
夜。わ。ら。ぬ。狂。け。ら。つ。ひ。お。狂。死。お。ぞ。死。し。たり。け。誠。お。衣。の。お。れ。果。あり。
片輪車の鬼よ。我子。お。か。せ。と。せ。と。い。ひ。く。狂。け。お。より。時。の。人。と。息
瓜。片輪車の鬼とも。一条。檟敷屋の鬼。とも。い。ひ。く。お。そ。ろ。了。半。の。話。柄
あ。け。と。う。や。日。も。又。實。へ。肉。芝。仙。が。鍛。墓。の。妖。術。の。所。為。あり。あ。す。この

鬼神を役。洛中の人民を。あ。や。せ。當。今。の。不。徳。と。い。く。め。く。世。と。乱。ん
為。あり。と。も。後。敷。屋。の。鬼。の。事。宇。治。拾。遺。子。見。由。さ。く。娘。唐。衣。が。歎。か。り。尽。せ。る。も。あ。ら。ど。や。と。く
自。害。を。も。と。ぶ。き。様。子。あ。れ。を。人。く。打。り。さ。ぬ。ぐ。お。こ。り。ら。く。あ。ぐ。さ。り。て
や。り。く。野。辺。の。お。ろ。り。を。さ。せ。ける。素。日。陰。の。お。あ。れ。ば。世。に。お。ろ。り。道。れ
む。と。遠。け。と。も。此。家。の。あ。ら。じ。の。菩。提。所。へ。ぞ。葬。け。れ。それ。は。さ。て。お。さ。さ。あ。お
又。かの。陸。奥。外。濱。の。医。師。老。熊。の。か。の。地。を。出。奔。し。な。ら。ち。小。京。都。お。遊。上。り
け。れ。つ。元。来。藪。医。師。あ。れ。ば。迎。鄙。ぶ。た。を。医。業。も。あ。ら。ん。良。医。お。ほ。と。こ
都。み。く。の。其。業。を。あ。と。る。あ。ら。ど。あ。り。ひ。ま。ぶ。た。計。あ。り。け。や。妖。術。お。お
近。頃。洛。中。お。衰。化。あり。く。人。を。さ。る。と。智。ある。盗。人。とも。其。虚。よ。と。ま。じ
く。婦。女。を。奪。ひ。遠。國。お。賣。渡。し。く。お。の。代。を。む。ご。り。け。が。これ。と。妖
術。の。所。為。と。あり。て。ま。み。ま。れ。ば。監。人。とも。い。う。く。時。を。得。ら。り。と。ま。じ。び。ぬ



十四



外と
の医師
老熊
遊上行
人
扮
藤六
唐衣
うび
うらんと
うらふ

吉原

三

さて老熊の家業の計りごとく。つひにかの盗人の仲間に入。高野山無名の橋下塔婆をたさけ。行人小舟を扮し。毎日洛中へ徘徊し。死めし女をつひにひける。偶藤六が娘唐衣をえつけ。誠ふしめるれ美人なるか。事を集り。あるとぞ千金を得べし。尋常の女十人を奪んたり。かき一人を奪ふ。ふまじしとぞ。それより他の女も目なげ。唯かれをうぐんと。のこなくみたり。唐衣の日陰の才。あれへ容易ふ出歩も。よ死折もあがりける。ふこのご母乃墓所ふまじしとぞ。度く出ありく。老熊天のふと。喜び癩病のあせ膝をぬるひ。途中みおして。棄とふんと。ころりぬ。唐衣が才のう危か。ける次第あり。

荒野牧

第十條

夫ハ叔むと爰不又。多田滿仲の家臣。大宅左衛門光雅といふ者あり。武

術文学に通じ。忠心無二の者あり。去る天慶年中。純友征伐の時。物心大將小野好古朝臣おつこ。六孫王經基王。左馬助滿仲公。西國へらり。ふひ。時光雅も箕田加藤等とも。おまごの行。豊前國葦原山の一戦。不抜駈し。軍令をそむじ。罪あり。主君滿仲公の勲氣をうり。て。俄に浪く。の舟とあり。常陸國土浦に住。少くのやくを以て。田地を求人。お作ら。も衣食の料。さ。か。武藝軍学の指南。年月を。年齢。己六十餘歳。おまごひける。妻ハ前おれ。り。唯ひとり。の男子あり。名を光國といひ。今年二十三歳。あり。けれ。おまご。れ。美男。も。聰明伶俐。人。不越。諸の武藝。不通。生得。大カ。あり。千斤。は。られ。の力量あり。あ。の。風流。文雅の志。深く。京都。あり。し。の。當時。梨壺の五歌仙。と。よ。其一人。博學の。不。れ。高。源順朝臣。おつこ。詩文

和歌を学び頗るの道を得たり。かく多能なる若人あれをらかるとみ
 およびく。高祿をよめりかへんとり者あり。婿ふのどむ者。まほくし
 二君ふつうあれ志あり。富貴をりしむ心もあき。唯父と同居し。辺鄙ふ
 うづりれく。いづつふ光陰ををちりけり。叔光雅の本國。近江の國あり。
 志賀の里ふ先祖の墓所あり。今年高祖父の百年忌みあり。終
 りとも。光雅の老意し。遠路の旅行あり。いづつ。光國をけり。い
 祭ちちんと。これふらう。光國。俄に旅装をとり。從者をも具せ。と
 唯ひとり。發足し。ちとあき。近江の國ふつと。先祖の墓。ふまき。りん
 ふ祭あり。り。京都ふ伯母あり。いさ。音信。み。これ。つ。て。なら
 都ふの。何。安否。を。と。や。と。名。ふ。あ。く。志賀の山越の難所。あ。を。は
 かりぬ。案内。ち。る。山。路。あ。る。く。入。ふ。夕。露。降。り。い。づ。つ。と。く。東。西。と。い。つ

や。か。と。く。ま。も。唯。手。ふ。い。れ。く。徑。踏。お。ほ。ま。よ。人。家。も。あ。く。道。行。人。も。あ。れ
 む。れ。ば。道。を。と。り。之。も。便。も。あ。く。唯。足。の。ゆ。い。ふ。ま。ら。せ。く。な。り。ち。れ。ほ。ど。に。
 山。は。く。迷。行。つ。い。下。日。の。暮。も。く。り。り。峯。の。猿。の。悲。し。く。う。び。谷。の。水。音。
 こそ。は。く。ひ。び。く。成。す。つ。いと。あ。や。ぶ。び。な。地。を。つ。ひ。苔。あ。り。か。た。岩。に
 橋。を。渡。り。ま。ど。し。く。險。阻。の。道。を。ゆ。さ。け。ら。ふ。頃。日。降。つ。た。る。雨。の。後。あ。れ。ば
 泥。水。高。く。く。糸。あ。り。道。ね。め。り。て。ま。か。が。く。頭。の。上。ふ。お。わ。ひ。か。り。た。す。梢
 あり。山。蛭。お。ら。か。り。く。襟。の。う。ち。ふ。り。り。岩。群。の。ひ。ま。より。も。こ。ひ。虫。も。腰。中。の
 う。ち。ふ。ら。ひ。り。鮮。血。あ。り。く。流。れ。く。痛。堪。が。じ。凡。蛭。ハ。狼。の。糞。中。より
 生。じ。狼。多。と。山。あ。か。あ。む。と。野。お。や。し。ず。此。思。ふ。は。ま。ご。め。く。か。の。獸。お。か
 か。ん。と。お。り。ひ。も。を。て。ば。お。か。背。後。の。か。お。狼。の。吼。る。色。こ。た。す。ふ。お。り。く。せ。さ
 ぐ。く。す。め。あ。み。く。の。者。あ。ら。ば。お。お。り。く。ど。か。強。く。膽。ふ。と。れ。男。あ。ら。ば

光國歎息。老く。若く。愛ぜん。思め。賢れ。愚ありを。か。つ。つ。ふ。赴く者。いく人ぞや。人の塚とあれども。塚又人を生ぜざると。ひとりごとく。さ。ら。う。は。無常と。觀。ド。げ。れ。折。し。も。尾。花。の。ち。び。り。た。る。所。さ。やく。と。あり。け。し。ぬ。こ。の。根。あ。ぶ。の。い。で。ま。う。う。と。松。蔭。あ。ま。と。と。ば。め。く。う。か。ひ。く。お。よ。さ。い。あ。く。く。人。あり。月。影。ふ。ま。か。い。つ。れ。れ。三。輪。み。く。れ。老。女。白。髪。を。し。く。老。く。松。ふ。松。蘿。の。の。ら。と。る。や。う。あ。ん。が。お。あ。い。襤。褸。の。と。こ。衣。を。着。く。繩。の。た。と。た。を。わ。け。鐵。爪。か。づ。く。つ。と。出。り。か。れ。夜。中。小。何。と。ん。と。あ。や。う。か。ひ。居。る。小。老。女。た。り。み。く。れ。腰。と。の。へ。と。あ。う。り。か。え。ま。り。時。も。夜。風。を。が。て。木。の。葉。の。こ。ら。く。と。散。ち。お。ち。ら。を。か。み。こ。こ。り。と。ゆ。れ。め。ぐ。て。か。て。一。つ。の。新。塚。を。堀。へ。一。指。桶。を。あ。ら。う。と。亡。者。を。引。い。と。と。見。と。む。あ。ま。う。し。さ。の。死。骸。あり。光。國。益。怪。ま。ん。た。れ。も。せ。ど。え。層。も。あ。や。う。

懐。う。り。剃。刀。と。り。お。し。か。の。死。骸。の。黒。髪。爪。剃。お。し。経。帷。子。を。と。り。く。こ。れ。を。包。こ。あ。や。桶。の。底。爪。探。り。く。う。り。出。と。物。遠。目。あ。へ。こ。う。ふ。又。く。ゆ。と。月。か。げ。み。か。が。や。れ。あ。ひ。く。と。と。う。く。と。光。を。え。れ。へ。一。定。鏡。あ。れ。し。さ。く。足。ら。の。物。を。み。る。情。ふ。お。も。め。死。骸。と。り。の。お。と。く。小。埋。め。鐵。を。か。づ。く。を。や。の。薄。原。の。う。ら。ふ。か。ら。れ。入。り。ぬ。光。國。始。終。を。と。と。め。ひ。け。れ。の。扱。も。不。敵。あ。る。老。女。な。棺。中。の。遺。財。を。棄。ふ。の。と。あ。ん。亡。者。の。髪。を。剃。く。れ。の。假。髪。お。賣。爲。る。と。し。せ。み。さ。さ。ぐ。の。悪。業。を。な。と。奴。も。あ。れ。る。あ。ま。り。と。や。情。と。ら。ぬ。奴。も。と。ひ。り。と。ら。く。志。ざ。く。く。か。さ。ひ。け。る。小。風。お。つ。れ。こ。こ。ゆ。れ。鐘。を。か。ぞ。め。れ。ば。も。や。子。の。刻。あり。か。く。も。の。夜。通。く。小。京。ふ。い。と。ん。と。と。も。も。か。る。さ。ぐ。と。ど。幸。い。た。あ。う。り。小。寺。あり。と。お。や。ゆ。れ。の。尋。行。一。宿。を。と。ら。や。と。鐘。の。と。と。ゆ。れ。か。と。心。あ。て。小。走。行。け。る。小。果。松。杖。茂。く。



大宅の太郎光圀



大宅の太郎光圀
 旅中ふかの新塚
 をめぐり賊運成る
 のありむ

大宅の太郎光圀

さらば光國もそこふ打卧。そと野々として熟睡の体をあらとあじり
 く。さうりふ砥みくりの研音ひびきあられぬ。やうくそのひきまを
 のぞきつれば。婆く志つみたれ片肌を脱。平廣菜刀を研体なり。
 果しく彼奴大賊あり。我寝首をかんとこくれあふん。枯木の如く
 老朽なぐり貪欲大膽の老女ありひつ。なや息をのこてうか
 ひ居られ折しも。門の戸をわたくとなく音と。婆くこれを夢はけ
 く立出。深夜ふもさうは誰あるぞとり。対のこの人これ老熊也。
 先うあけくよといふ。婆く戸をまぶさあけく対の方ふ出。何
 うやく様子あり。光國窓のひきまうり対のかと取えれば。眼はあけ
 胸もまぶさ。このこれ大法師。白布あけく頭を巻。白行衣めたうれ
 りのを着く。手桶のうらふ鉄の齒の足駄をりれく提く。は行人

の体あり。そのあとお立されん。と食とおがく。頭の毛も眉毛もあく。
 面の皮破と鼻齧おち。口のわりの内爛く黄くみられ齒のあふり
 くれぬ。癩病のみとあふり。此者ひとり。の女を小服あけく抱くを
 くれ。色よれ衣を着たれ半弱女あく。口小猿嚙をくらめられ。腕は荒
 縄をりく。くじあげられ。恰も屠家ふらわれ。羊のごとく
 かり。折しも雨雲くれく月の光あふり。あはこまふ。ふらふ。癩
 病の膿水。かの女の玉のやうな顔のふみ。わくくと落りてく。目も
 赤のびがごとく。やうやう何ごとく。耳をさばだて。さふ。かの行人が
 いとく。かみくあんぢあも語りおさう。美を。今夜首尾よく奪ひ
 ころぬ。今夜一夜あがり。幸丹後の國の人買ふ約し。おきたれ。む
 聖の千金ふ。代物あり。なんぢあも一夜の宿錢をわく。報をさし

ようこぶしを夏あふむやといひく打笑子の口へ婆の手をぬて押止め
 声たつとる。昨夜の丁子頭今朝のよるこび鳥のまじりありとちひひけ
 ど我家も揺銭樹を宿しおとめとく耳ふつとくさか。我一人
 あくおやつなくとひいふ。さういふ汝等のまゝ天のなごけあり。ちやうく
 その女がこの柴小屋おつるまじおと。汝等兩人さうあり。若我事
 を仕損じかの者逃出さむ。さう打殺しられよか。裏口へくかを
 たれば逃出さむと様はしとまわし命とれば行人うまづさかの女を柴小
 屋ふらとちおと。麻追捧をさうく癩病やみお持せおのれへ鋤ととり
 ず。門口の左右お立ちあふむ。婆へ研さしと明晃いたは平廣菜
 刀提く内お入れ。光國ハヤヤりの所お卧。又さふ野狐ささく居
 くとお婆いおまわし便宜さうかぶさぬま。技足しつやとと障子を

あけし内より。光國が卧され上お馬をおかきさかりと。あつと寝首を
 かんとき時分よりと光國しくと起上り。婆しが襟首はみかふさうせ
 く投たふお壁を打破りく外のかへと投しぬ。光國壁のうらととふ
 ず。けいけく外のかへととり出ければ。門口お待まうけたは兩人さう仕損せしと
 おひつ。左右一度おりら膝折んとさうまらる。光國ととり上りくこれお
 飛越。又打かろお婆といひわりと。かひくら。先癩病サミをかいつとく投
 たりとれ。忽松根お肚を打つけられ。断線偶戯のごとく。揮軟とありそ
 光くげり。老熊ハカとく大膽不敵の者あれ。光國が手段おもおそれる。
 汝いふとさうさくとも其俣おとつた。我見入されハ毒蛇の口におりお
 かしといひつ。無二無三お打かれ。光國中にしくもやといふとあざ笑
 ず。あざいさみ戦つたの空所をえく。鋤のささをさつととく。いそぶしく



第百四十五



光國より人々のを賊の
 家小やどり婆とて
 藤六の娘吉衣を危難に
 そくし

第百四十六

おとろく。ふじしゆへむ。中りく涙をのこひ。妻が薄命をすくたふよとく
 近くより。父藤六主君頼信を謀く手打ふ成しことを始りて。家そのれ
 生く一条棧敷屋ふかられ住寔化の爲ふ身とれ小兒をさられ母乱氣て
 死すり。おのれ行人の爲ふ奪れ。此所へ身りしすでの始末のあふすり
 語りけし。光國益驚き。某今夜此山中をさすも。京都ふらりて。山身
 の安否をとりん爲むりかり。さある山事のおんと露むりもおひり
 たり。悲涙小袖を志わりさり。藤六が妻綱手ハ。大宅の光雅が妹あく。
 光國が爲ふ伯母ふれはふく悲しむも理あり。扱先証の騒動小踏散
 たり難具のうらふ麻笥ひがかり。らよりらいた鏡のすらびいせあり
 ちるも。唐衣偶えつけり取あけ。をかへくよくえよりあり。あふり
 此鏡と祖母のかたきあり。母人奉じく持傳へ家をのれせ

時すくも。肌皮をさる鏡かれハ。若心残りやせん。棺桶のうらふ入て
 葬じらふ。何とくさふあれをといひつ。又經惟子と黒髪をえつけ
 これの母人不着さふせ。死出の旅衣あく。此袖ふあせし。母人の
 の戒名あり。是等のおのらふあれのうらむいふしと吐息し
 いふ。光國これを打つ。さても不思議の事よとく。先刻途中あくかの賊
 波。新塚をあらをえられ。唐衣をれこそ母の
 塚もれ常々髪おしみ志多ひの名その体不葬がさてこれの母人の
 髪のもくといひく。又今更の中ふかさく。涙おしせびりれ。此鏡ぬ
 妻がふりし。長さかきおせよとく。母人のふへふそのあめ。此
 黒髪も假髪とさ。常ふかいらふひりれ。共ふが衆とおふるし
 とく。經惟子とさ小懐ふかさめられ。光國い。さての志ありらる。

凡夫のりふりさへ。よその無常とのこ多ひくこ。おありさよ。某彼者ども
を殺したれ。此所小長居。夜明小い。事むりし。た人道を。まど
ども。そや。此所。立去。さ。唐衣を背。足。走
る。幸途中。夜山。の獵夫。山中村。委し
く。夜。走。東。頃京。一条棧敷屋。ハ
昨夜唐衣の失たれをお。騷動の寂中。光國。ハ
け。大。喜。た。細。つ。光國唐衣を同伴で。
常陸の國へ。ま。

ろとし人の常言。湛いた。青天。未曾意を。奉
み。先。し。湛。青天。し。し。
い。悪意の。天。し。知。

罰を下。ふ。本文。賊波。貪欲。好。
大膽不敵。忽天道光國。手。これを。罰。悪の報。
善の報。速。世の童子。此道理。天罰。
お。塵。も。隠。お。し。

善知傳卷之三上終

